資　料

ソーシャル・ビジネスに関するインタビュー調査(その３)
― 社会福祉法人1980のケース ―

HALIYA AKELI（ハリヤ アクリ）
加 藤 里 美

Ⅰ 概　　要

本資料は、2020年７月23日、博士前期課程のハリヤ・アクリと指導教員である加藤里美が社会福祉法人1980の理事長に半構造化インタビューを行った内容である。

質問項目等はAKELI・加藤(その１)に準ずる。

Ⅱ インタビュー調査

(以下、字数の関係上、ハリヤ・アクリは「ハリ」、理事長は「理長」とする)

ハリ　*なぜ現在の仕事を始められましたか。*

理長　私が最重度と言われる子供を産んだからです。1980年当時、最重度の子供には国の制度が何もなかったのです。それまで最重度の子供は長く生きられず、多分親が生きているうちに亡くなっていたのですが、医学の進歩とともに生きるようになりました。そうすると、それまで学校も行かなくていいとなっていたところが、学校に行けるようになり、その子たちの親が死んだ後の先を心配することになったのです。そこから、親として何をすべきか、ということを考え始めました。最初は、今から思えば愚かにも、お金を残してやればいいと思ったのです。だから、親が何かお金を生むことを考えたのです。でも、それについてこられない親もみえて、中には、お金持ちのご両親を持った方はお金で施設を作ったとか、お金で解決をされるようになったのです。しかしそれは本当に一握りの人だったので、この子たちに何かをするというときに、何をしたらいいのかと考えたのです。結論としては、この重心(重症心身障がい)の子たちの周りに人をつくらなきゃいけないと思ったのです。

この子たちを支援、応援してくれる人、当時はボランティアさんが必要

だと思ったのです。ボランティアさんたちを募って、ボランティアさんたちにこの子たちの存在を知ってもらってと思ったのです。恥ずかしいのですけど、私は自分の子供を産むまで、障がい者というものを全く知らなくて、盲とか聾の人はよくわかったのですけど、最重度の人たちがいるなんていうこと、思いもよらなかったのです。なので、まずは知ってもらうことから始まったのですね。当然ビジネスとしては全く考えていませんでした。でも、ボランティアさんを募るということは、そこにお金が必要になったのです。はっきり言って、お金なくしてはボランティアさんも集まりませんでした。

子供たちを海に連れていこうと思っても、ボランティアさん抜きでは連れていかれなかったのです。私は昔人間なので、人の世話にはならない、人には迷惑をかけないといって教えられてきたので、子供が人の世話になるということを、すごく恥としたのですね。でも子供というのは社会の宝です。障がいがあったらその子供たちが宝じゃないということにはならない。この子たちが宝になるように、私たち親が頑張らなきゃいけないと思いました。それで、最初のうちはボランティアさんの費用も全部親たちがもって活動を始めたのです。

そこから、ついてこれない親たちがどんどん出てきましたので、今度はお金をどうやって生もうかと考え、バザーや廃品回収など、いろいろなことを始めました。ですが、それもやはり限界が出てきて、そのうちだんだんと制度に興味を持つようになりました。この子たちを産んだために何でこんなに親たちが苦労しなきゃいけないのか、これはちょっと違うのではと思って、名古屋市や厚労省に話をしに行ったのです。そうしたら、こういうところにだったら補助金が出るとか、制度的なことを覚えてきました。そうすると少し助かるかなと思いました。

同時に、今まで生きていない子たちの制度ですので、案を提示しないといけませんでした。自分たちで考えて、こういう制度が欲しい、こういうふうにお金をくださいということを提案しまくったのです。それで、徐々に徐々に、そこに制度がついてきてくれました。こちらにも少しずつ少しずつ制度的な知恵がついてきました。

そういう中で、こういう職員が(横にいるＫさんを紹介して)ついてきて

くれて、「僕たちが見ていきます」と言ってくれるようになりました。そうすると、親たちは、こういう職員さんを育てようという気持ちになり、行政とも話して、補助金をこうしておろしたらいいなぁと考えるようになったのです。ですから、ビジネスというより、継続させるためには何が必要かということです。それから、これも社会資源の一つなのですけれど、これを自分たちだけじゃなくて広くみんなに利用してもらうためにはどうしたらいいか。その二つを考えるようになりました。

それと、かかわった職員たちが幸せにならなきゃいけない。職員に私たち親と同じような苦労をさせてはいけないと思っています。普通に会社で働いている人たちと同じようなところまで、職員さんたちを保障していってあげなきゃいけない。最初に考えたのは建物です。しっかりした建物でなければ誇りに思えないですよね。そういうところから始まっていきました。

加藤　建物には、補助金がでましたか。

理長　親たちが積み上げたお金を貯めてきて、まずは法人認可を取りました。法人認可を取るときに、それまで親たちが頑張ってきたお金を使って土地を買いました。そして、補助金をもらって建物を建てました。ここが二つ目だったのですけど、もう一つまだ今もつくっています。

加藤　親御さんたちのお金ということですが、当時何人ぐらいいらしたのですか。

理長　多くなったり少なくなったりです。亡くなられた方もいらっしゃいますし、本当にいろんなことがありましたけれど、多いときは20人ぐらい集まったのです。しかし、最終的に残ったのは３人ぐらいでしたね。20人いて、10人減って、また少し増えて、減って、法人認可を受けたときには３人しかいませんでした。

ハリ　その後について教えて下さい。

理長　今までそういった受け入れる器がなかったので、つくったときには、うちの子も入れてくれと、今まで一緒に歩んでこなかった人たちが集まってきました。

ハリ　それは募集されたのですか。

理長　募集しなくても、皆さん困っているから。子供たちはどんどん大きくな

りますからお母さん一人では、もう抱っこができない。先ほどエレベーターの前にいた子も、お母さんは亡くなられました。お子さんが亡くなるケースもあります。だけど、受け入れるところがなければ、当然探される。うちは何も宣伝したことないのですが、皆さんがみえます。

加藤　親のほうが必死だからですね。

理長　そのとおりです。

ハリ　そのときは、料金はどのぐらいでしたか。

理長　食事代はいただきましたが、それ以外は別に。行政からおりたお金に、親たちがバザーなどいろいろなことをやって工面したお金を足して、職員さんたちのお給料を払い、必要なものを買い、少しずつ貯めてまた次の施設をつくります。

加藤　お母さん方も支援に参加されるのですよね。

理長　10年ぐらい前までは、ほかに施設がないので、皆さん進んで協力してくださったのですけれども、今のヘルパーさんのサービスができてからは、その制度のおかげで、親御さんたちは別に通う必要もない。そういった制度を使えるので、もう全然協力はないです。お迎えに行って、こちらに来て活動して、ご飯も食べて、お風呂へ入りたい人は入れて、そしてまたおうちまで送るということです。

ハリ　寄附金はどうですか。

理長　寄附金、それはちょこちょこありますね。

K　前は自立支援法、今は総合支援法といった支援費制度というところから支援費が出ています。障がい者の制度もどんどん変わってきまして、そういった制度にのっとって、やったことに対してお金がおりてくるという形になっています。

ハリ　それでは、どのようなミッションを持ってみえますか。

理長　「すべての人に社会的自立を」ということで、誰もが人として尊厳が守られ、社会の一員として共に暮らしていくことができる社会を目指すというものです。

ハリ　経済的な仕組みはどのようになっていますか。

加藤　今までのお話をまとめると、最初は自費で、寄附もあり、自立支援法、総合支援法からのお金で回しているということですね。あと、表現が難

しいのですが、ここを軸として事業内容が幅広くなっているように思うのですけど、これはどういうプロセスなのでしょうか。

理長　親亡き後、その子供たちに対して、ステージがいろいろ変わっていく中で、それに合わせたあらゆる制度がしっかりできていかないといけないということから、この年代のときはこの制度が欲しい、必要ということで、行政に働きかけてきました。

K　ショートステイなんてない時代から。

加藤　障がい者のショートステイって、なかったのですね。

K　そういうサービスというのはありませんでした。

加藤　そこを開いたということですね。

理長　そうです。こうやっているのだからどうにかしてよと名古屋市に掛け合って、1年から2年すると、向こうも考えてくれました。一番大きかったのは、私、「こういう重心の子を社会の資本主義の中の経済の一つの流れに組み入れてくれ」と言ったのです。そうじゃなかったら、あるときは切られ、あるときは調子よく出されてもね。消費税だって、障がい者のためと言うけど、何にも関係ない。

私、子供たちも連れて厚労省に文句を言いに行ったのです。何回も行ったよね（Kさんが頷く）。私たちは消費税のことを言った覚えはないのですけど、ただ、障がい者を見てほしい、そのお金を出してほしいというビジョンを出したのです。そうしたら何年後かに、10年もたたないうちに、日本中からいろんな人を集めてきて会議を開いて、今の支援費制度とかいったものをつくってくれたのです。私たちはもう既にやっていたものですから、即お金を請求できたのですね。書類だけつくればよかった。ショートステイも、親たちがお金を出して、そのとき私たちは「支援員」と呼んでいたのですけど、支援員を募って、チケットをつくって、いざというときにはショートステイで見てもらうとか、そういったことを自分たちでつくり上げていたものですから、「こうやっている。やれなくないでしょう。ここにお金を出すべき」というふうに行政のほうに働きかけました。厚労省に行ったら、話が早いです。厚労省が制度をつくってしまうと、それで全部流れてくるのです。

加藤　厚労省にもうまく会うことができたのですね。

理長　申し込むのです。また、厚労省がいろんな委員会の傍聴人を募っているので、そこへ行って、言いまくりました。若いときは、そういうことをして、お金がおりるように頑張りました。自分たちだけじゃないのです。日本中の重心の子供たちの境遇がよくならないと、私たちだけが一所懸命やったって、何もならないのですよ。そうしていかないと、続かないのです。やはり制度をつくらない限り何ともできないと思います。そのころは、昔から古くからやっていらっしゃる親御さんと随分とぶつかりました。「こんなかわいそうな子たちは、保護して大事に、大事にしているのですよ」と言うのですが、私は、「それは違う。この子たちも、障がいは重いけど、世の中で果たす役割がある」と主張しました。そうしたら、「ひどいことを言う」と言われました。まずはそこからです。私の主張をすると、ほかの団体とは、うまく足並みがそろわないのです。本当にハードでした。いまだに国はそういう団体を第一に呼びますので、自分たちが意見を言いたいと思えば、傍聴人で文句を言わなきゃいけないのです。

K　国は、大きい団体からヒアリングで意見を聞く。全国的な団体を呼ぶので、いくら言わせてくれと言っても、そういうところへは呼んでもらえないのです。

理長　顔がばれてくると、手を挙げても当ててくれなくなりました。

加藤　よく闘われましたね。

理長　子供たちを連れて何回東京まで行ったことか。「ここへ子供を置いていきます。見てくださいよ」と言って。でも、親たちだけではなかなかできないので。学生だったボランティアさんたちが一緒に応援してくれて、行ってくれました。親が子供を見ながら行けませんもの。あとは、大学にも話しに行きました。愛教とか名大の先生に直接アポをとって、「何でこんな制度のまま放っておくのですか。何で養護学校なんてつくったのですか。それが差別の始まりです」と。こういった子たちを地域から隔絶すると、世間の人は知らないのですよ。最初は、あの子たちの車いすを引っ張っていくと、「ちょっと来て」と言われ、「はい」と言ってそちらへ行くと、「こんな子を散歩させて、うちの娘がもうすぐ子供を産むのに、こんな子をうちの娘が見たら縁起が悪いから、外を歩いてくれる

な」と言われました。散々でした。でも、もし私がその立場だったらと考えても、いい気持ちはしないのだろうなということは想像がつくのです。ということは、一体何が原因かといったら、社会にこういう子たちの存在が知られていないことが一番の原因です。なぜ知られていないのかといったら、学校へ上がるころから養護学校に詰め込んじゃっているから見えないのですよ。それが間違っていると思って、もっとみんなの前に連れ出すことだと思いました。エレベーターのない階段に行っては、きつそうに運びました。そうすると駅員さんがおりてきて、じっと見ているのです。「すみません。手伝ってもらえませんか」と言うと、最初のころは逃げていっちゃいました。でも、そのうち手伝ってくれる人も出てきたので、「大変ですよね。エレベーターがつくといいのに」と私たちが言うのです。そうすると、知らない間にエレベーターがつく。

加藤　*現在は何とかつくようになりましたね。*

理長　ここ20年間は闘いの連続でした。そういう歩みの中で、制度が変わってきたこともあり、国も少し理解を示してくれて、「お金を出したらこういうふうにやれよ」となったのです。私は、「これは本来国がやる仕事だよ。親たちがやる仕事じゃないよ。あなたたちのかわりにやるのだよ」というスタンスで、今物を言っています。だから、「私たちができないのだったら、あなたたちがやって見せてよ」と。

加藤　*むこうはやれませんよ。現場がわかりませんから。*

理長　そうです。今はお金もそうやって生まれてきて、職員さんも雇えてきてくれましたが、今度は若い人の求人です。若い人たちは現場を嫌うものですから。

加藤　*そうですね。最初にAさんが私の研究室にみえたとき、外国の人を雇用するということはどうなのでしょうかといったことを聞かれたように思います。*

理長　今ベトナムからの留学生が、派遣会社から３人きてくれています。週28時間、バイトで働いてくれています。外国人ということの最初のきっかけは、韓国の留学生がかかわってくれて。

加藤　*以前、Aさんからお聞きしました。名大の学生で、とてもよかったと。その韓国の学生さんは、結局どうされたのですか。*

理長　日本の会社に就職して、時々遊びに来てくれます。そういうところから、人間に変わりはなく、お互い誠実につき合っていったらいいじゃないかなと。今のベトナムの学生も一所懸命やってくれています。

しかし外国人もいろいろで、ボランティアとしてはかかわってくれた外国人も何人かいますけど、やはりお金が最優先なのです。だから、日本の子と似ているところがあって、働かずしてお金を稼ぎたいという傾向にあり、なかなかうまくいかなかったです。日本人の若い子たちはお金に困っていない。親に頼っているので、お金のために働くという意識は全くないのですね。でも、今のベトナム人は、何か一つ違うなと思うところがあります。

加藤　最近の日本人の学生さんは変わりましたよ。多くの学生さんが奨学金借りていますし、学費も一部自分で稼いでいます。就職活動のときに、「僕にはこれだけの借金があるから、毎月これだけ払っていくと43歳ぐらいまで払わないといけないです」と話してくれ、それを考えて就職していきます。そういう学生も多いです。

理長　変わってきているとしたら良いですね。今の職員さんたちは、お金よりも休みです。給料もそんなに上がらなくていいけれど休みは欲しいし、きつい仕事はやりたくないと、皆言います。だから、例えばこの人１人（Ｋさん）の仕事を３人ぐらいでやります。比率にするとそのぐらいです。だけど、今のベトナムの学生さんたちは、そういうことは見られません。一つのお金の対価としてこの仕事を見ていてくれるのかなと思っていて、例えば、障がい者の人を見たら幾らと、そのために自分は働くという意識でいる。見ていて、何となくそう思います。日本人の子たちは、お金とそれとを比べないで、なるべくサボるのです。例えば、ここでやらなきゃというところでも、黙って見ているだけとかね。だから、一つの動作、一つの仕事をやっていくときに、何となく差を感じます。だからか、これをやってほしいなと思うところに、ベトナムの学生は、言わなくてもちゃんとパッと手が出てくるのです。言うときもありますけどね。日本人の若い人だと、言っても「ええっ」とかいう感じです。そこがちょっと違うのかなと思っているので、私たちも、例えば、ベトナムの人との関係を埋めるのに、何かできたらいいなということは思って

います。ただそれだけで終わりたくないなと思ってね。雇い側と働く側だけの関係で終わらせてしまったら何か嫌だなということは、私自身は思っています。

加藤　それはもう人ですね。人によりますね。

理長　一人一人を見て接していくべきだなということは思っています。

加藤　地域生活支援センターをされていますが、それはどういうプロセスで。

理長　必要だったので、制度がないところにつくってきたのです。例えば、おうちにいるときにお風呂に入れられないとなると、誰か来て入れて欲しいですよね。そこで支援員という制度を自分たちでつくった。今の居宅のヘルパーさんの派遣と同じようなことをやっていたわけです。

加藤　相談支援事業所の「ひらけごま」というのは、ここに相談に来てもらう所ですね。

理長　相談支援というのは、障がい者の方にどんなサービスが必要か、それをセッティングする事業所です。重心の子たちは、自分で何も言えないし、表現もできないので。本人主体のサービスを考えてあげなきゃいけないと思ってつくりました。

加藤　いわゆるケアマネさん的なところですね。短期入所事業というのが、ショートステイということですね。では、生活介護事業というのは。

理長　こういうところに昼間通ってきているもの。

加藤　福祉ホーム愛さんというのは。

理長　親たちが亡くなった後の生活の場です。

加藤　それが一番心配ですね。

理長　そうです。今も、親御さんが年をとってきたら、ある程度見られるうちに預かって、そこで親御さんから教えてもらって、いざというときちゃんとやっていかれるように計画してやっています。

加藤　放課後等デイサービスというのは、どういうふうにやられていますか。

理長　放課後デイサービスは、夏休みや春休みの学校のないときに、お母さんたちも子供たちも困っちゃうのですね。最初に障がい児を授かると、自分とは全く異質ですので、もうどうしていいのかわからないのですよ。そういった親御さんたちが困っているし、せっかく養護学校である程度しつけられてくるのですけど、そのブランクがとてもかわいそうですし、

それで始めたのです。

加藤　私もわからないだろうなと思うので、そういうお母様方もここにみえたりするのですね。そういう方々に何かアドバイスする場もあるのですか。

理長　昔ですと、施設がなかったし、サービスがなかったから、親御さんたちはすごく低姿勢でした。聞かなきゃいけないという立場なのですね。今はサービスがあるから、私はこういうふうに思っていますと。要は、子供自体が商品なのです。今はその子供を見て幾ら稼げるかという世の中なので、親御さんたちは自分が得するところに預けたいわけです。だから、アドバイスとかそんなのくれるような事業所は、はっきり言ってお断りなのです。

ハリ　わかりにくいのですが。

理長　例えば、昔は「おむつをしていたら施設はどこも受けてくれないよ。だから、お母さんたちは頑張っておむつを外すようにしてくださいね」でしたが、今はもう全然そんなことありません。そんなことを言おうものなら、「もういいです。ほかを探します」と帰っていってしまいます。そういう人は多いです。事業所は一人の子を見たら幾らって稼げるわけです。だから、その子がおむつをしていようがしていまいが関係ないのです。そういう世の中になってしまいました。私、まさか障がい者の人がお金のそういうものになるとは思っていなかったし、そんなことがあるのかと。

親御さんは自分の都合がいいところに入れるのです。例えば、夜５時で送ってくるところと、夜８時で送ってくるところというと、８時のほうを選ばれるので。

加藤　働いていたりすると、８時のほうが助かりますね。

理長　そうです。そして、８時まで何をやっているかということは問題じゃないのです。犠牲者は子供です。障がい者なので、親との結びつきがあって初めて、親と子が共有する感情でもってつながっていくのですけど、それが育たなくて、今の子たちは本当にかわいそうです。

加藤　育っていないとわかりますか。

理長・K　わかります。

ハリ　施設に入る条件として、何歳からというのがありますか。

K　放課後デイは小学校から。

理長　学校に行っている子たちが対象です。うちはやっていませんが、ゼロ歳児の子でもあります。やらない理由は、学校にも上がらない子は、やはり親御さんとのかかわりが大事です。遊びすらわからないで、学校を卒業してここへ来る子がいます。例えば、テレビを見て楽しいと思う感情は、親が喜ぶのを見て共有して育まれるものなのですけど、そういった経験がないので、わからないのです。それができている子は、そのテレビをやると、喜んで手をたたいたりします。親御さんが多分その子と一緒にテレビを見て楽しんだ経験があるのだと思うのですね。でも、そういった経験がないと、黙って見ているだけなのです。

加藤　「おもしろいね」と言って一緒に見たことがあるかどうかですね。

理長　そうなのです。だけど、ぼーっとして見ている子は、全然そういった家族の人との接点がないのです。だから、職員はまずそこからつくらないといけないのです。その子は何が楽しくて、何が嫌なことなのか。それがないと発達の支援ができないのです。そこから後は職員に一所懸命やってもらうしかないのですけど、障がいの子は物じゃないのです。人は人によって育っていくし、育てられる。

加藤　高齢者の訪問介護も最近始められたのですか。

理長　そうです。たまたまボランティアさんで来てくださっていた方が高齢になられて、認知症になられたと聞いて、何か恩返しがしたいと私は思ったのです。それで高齢者の認知症のグループホームをつくりたいと思って10年ぐらい名古屋市に申請していて、やっとオーケーが出て、来年の１月にオープンするのです。それまでは、派遣でヘルパーさんがお掃除に行っていました。

加藤　今はそんなにできないのですか。

理長　名古屋市は何床ということで認めたい。普通は200床とか100床とかで、多いほうがいいのですが、うちはそんなに知らない人を見るより、その人の生活を知っている人たちを見たいと思ったので、私は５人と思っていたのですが、８人にしてやっと認めてもらいました。

加藤　100床のような大きなところはなかなか手が回らないのですけどね。

理長　ベッドはあっても職員がいないから、今高齢者のところは空きベッドだ

らけです。新卒で50人入ってきても、もう１年後には、その子たちはいない。

ハリ　待遇も悪いのですか。

理長　待遇というのか、職員さんを育てられない。学校とは違うのでね。そこにやりがいが見出せなかった、こんなはずじゃなかったとか、聞くとそういうことをいろいろ言われます。

ハリ　ここの正規職員は何人ぐらいいらっしゃいますか。

理長　正職が22人と、非常勤さんたちが30人くらいかな。

ハリ　非常勤の方はどんな方ですか。

理長　男性とか、おばさんとか。男性は特に、退職した人とかが多いですね。家で暇だから、週３日なら来てもいいよとか、運転手で来てもいいよとか。

加藤　それぞれの役割で協力したいということですね。

理長　それでまとまって、一つの事業所になっています。地域の方とあとは学生さんです。

ボランティアですけど、やっぱりバイトとしてお金は出しています。

ハリ　ソーシャル・ビジネスは社会的成果と経済的成果の両立が重要とされていますが、実際に事業をおこなっていて、どのような点が難しいと思われますか。どう両立を図っていますか。

理長　まずは、その事業が必要とされるものじゃない限り無理ですね。そして、その必要性を認めさせることが一番難しいなと思います。それを証明して見せること。厚労省なら厚労省を納得させて、厚労省の人たちがこれはいけそうだなと思ってくれるまで頑張らないといけない。歯車が一つ動き出すと、回っていきますので。あと、いつもビジョンは持っていないといけないですね。こうなるべきだ、こうしてくれないのはおかしいでしょうというビジョンがないと、先には進めないのです。こういう状況になった今でも、やはり次なるビジョンを持っていないと、ここで止まってしまいます。

加藤　職員の方もそういったビジョンを共有されているということですね。

理長　上の人たち、昔からいる人たちだけです。今の子たちは、そういうことを言うと、「もうやめた」と言うのです。「自分たちは９時から５時までの時間を売っているだけだから、それがたまたま福祉の職場だったとい

うだけなので、この事業にやりがいがあって、こうやって動かしていきたいとかいう原動力はないので」とはっきり言われます。だから、動かす人になるよう育てることも、これからの課題ですね。

その人たちの興味を引くために、その人の希望していることを上手に組み合わせて、そっちへ引っ張り込まなきゃいけないのです。今、人を育てるのに苦労しているのかな。今は多様性といって、皆それぞれ違うでしょう。昔の人は「これはこうでしょ」と言えば終わったのですが、それが通らないのです。

加藤　人を育てるのは本当に難しいです。でも、人を育てていかないと続かないということなのですね。日本全体の大きな課題です。

理長　本当にそうです。あと、職員には働いてきてよかったと思ってもらえるようにしたいです。そのためには、まずは建物を建てないと、いろいろなことがそこから始まりましたが、「ビジネス」と言われると違和感があります。しかし、安定しなきゃいけないのです。

ハリ・加藤　今日は本当にありがとうございました。

Ⅲ　インタビュー後記

社会福祉法人1980（いちきゅうはちまる）の名前の由来は、1981年に国際障害者年がスタートし、1992年には国連「障害者の十年」最終年で幕を引いたが、重症心身障がい児・者やその親の方たちにとっては、真の改革がなされたとは思えない状況だったことから、1980年のままで、夜明け前のままという気持ちからである。今回、社会起業家である理事長から重症心身障がい児・者が人として生活していくためにはどうしていくことが本当の意味で必要なことなのかを考え、どのように行動されたかについてお話を伺うことができた。常に前向きに進み、それを支えている人たちにたいへん感謝されている理事長のお話には、そういった人のためにも組織を安定させていなかければならないという強い意志が感じられた。それが働いてくれる人材の育成にも繋がる。社会的成果の実現のためには、経済的成果を考えていかなければならないということである。その一環として、社会福祉法人1980を支援してくれた人を対象にした高齢者のグループホームを設立された。このことは、組織へコミットしてくれた人に対

する組織からのサポートであり、形の変わった経済的成果とも考えられる。それは、また組織として継続していくことにも繋がっていることを示す事例である。

謝　辞

社会福祉法人1980の理事長・久留島光保子氏、地域生活支援センター「Heart Link」の小池征司氏にはたいへん貴重なお話をしていただいた。深く感謝する次第である。なお、本稿に事実誤認があれば、それは筆者の責に帰すべきものである。